

『国冬本源氏物語』注釈書の試み

—— 桐壺・少女・野分・柏木・鈴虫巻の物語世界を中心に ——

山口(越野) 優子

要旨 現在、源氏物語の注釈書といえば、大島本・定家本源氏物語などの青表紙本系統本のもの以外皆無と思われる状況であるが、そろそろ、この状況から解放されたい。自筆本の存在無く、数多くの伝本の総体がこの物語の真の姿であるならば、それぞれの伝本の注釈が生まれるべきであろう。稿者はそうした考えから、来るべきそのような未来の為に、国冬本源氏物語(天理大学附属天理図書館蔵)について、特異な独自本文をもつ巻巻を中心にまずは試作版を作り、この試みについて考察した。

一・はじめに

源氏物語は作者自筆本を現存しない。作品が描かれた当時は、作者という概念は現在と異なり、作者など不明な作品が多かった。そう考えてくるとならば自筆本再建への道にそれ程こだわる必要はなかったはずであるが、稀代の文学作品であるという呪縛から逃れるのは至難の業であった。収斂する先を求め、その結果、長い間ごくわずかな伝本の源氏物語のみ―具体的に「大島本」を頂点とする―が、あたかも唯一の「源氏物語」であるかのような状況が続いてきたのであった。しかしこの物語の伝本の歴史を振り返ると、それが問題に満ちたものであったことがわかる。まずその伝本の歴史から述べる。

一―二・歪曲した歴史

『源氏物語』には、本文系統として「青表紙本」・「河内本」の二大系統がまずあり、これ以外のものを「別本」として種別している。このうち青表紙本系統（とりわけ「大島本」）が、通行本文として、昭和三十年頃から不動の位置を保ってきている。現在市販の活字本の底本は、ほぼ例外なくこの青表紙本系統である。しかしながら、世界的な文学作品であるこの物語の通行本文が、十分な検証を経た上で選び取られたとは言いがたい。

前述のように作者自筆本が現存しないこの物語では、本文研究史はそのまま伝本研究史になるが、自筆本に最も近い時代から室町期頃までは、現在とは全く異なる伝本の状況があった。それを証明するのが、最古の古注釈『源

『氏釈』所引の本文が、「別本」とされる「陽明文庫本」であり、そして『花鳥余情』所引本文が「河内本」であることである。⁽²⁾ また鎌倉期頃の注釈書の依拠本文は河内本系統本が多かった。このようにその頃までは「河内本」⁽²⁾ ついで「別本」が大きな存在だったのである。しかし室町期以降から、和歌に名高い三条西家の系統の本文が台頭する。この流れの中、三条西実隆などの（藤原定家崇拜）により、定家の書写校合による「青表紙本」の存在が大きくなっていった。

その「青表紙本」が決定的な存在になったのは昭和期に入ってからのことであつた。昭和五年または六年、佐渡の某家で飛鳥井雅康筆、青表紙本系統の五十三冊（浮舟一卷を除く）が発見されたのである。「大島本」と名付けられたこの伝本が、源氏物語の権威と既になっていた定家の「青表紙本」の形態を忠実に伝えていることなどの理由から、近代の権威となりつつあつた池田亀鑑によつて定本とされ、これら青表紙本系統の伝本——中でも「大島本」を底本とする『源氏物語大成』八冊という大部の校異の集大成が昭和三十一年に完成したことで、この物語の通行本文として、青表紙本系統なかでも「大島本」が、不動の位置を占めるに至つたのである。

問題は、文献学において当然なされるべき本文への考証が十分になされた訳ではなく、ごく端的に言えば、中世と近代の二大権威（藤原定家と池田亀鑑）によつて通行本文が、今までの長い歴史にもかかわらず、昭和期に定まってしまったことにある。そのことにより河内本系統は存在を軽視され、いわんやそれ以外の伝本の総称「別本」においては、約四十年近く忘れ去られてきたといつても過言ではない状況となつた。

一—三— 転機—底本の崩壊／未詳「別本」の発見と注目

このような状況に対し先学が手を拱いていたわけではない。まず「河内本」に関しては、加藤洋介氏が、前述の『源氏物語大成』と同基準で三七伝本を対照し、『河内本源氏物語校異集成』をまとめた（風間書房、平成十三年二月）。そして「別本」に関しては、伊井春樹氏・伊藤鉄也氏・小松茂美氏編『源氏物語別本集成』（正編十五巻、おうふう）が昭和六三年から刊行を開始し『源氏物語』五十四帖を網羅し平成一四年完結した（現在は正編で未収の伝本の校異を続編で刊行中）。不動の位置を占めていた青表紙本系統以外にも『源氏物語』が存在するという、当たり前の事実が平成期に二つの大きな成果に結実し、我々に突きつけられたと言える。本文をめぐる研究状況は動き始めた。

平成十九年、源氏物語の底本が根底から揺らぐ考察が出された。佐々木孝浩氏により、青表紙本の頂点の一にあって大島本が、飛鳥井雅康自筆本ではなくその転写本であり、更に浮舟巻のみを欠く一筆本ではなく、二系統に分かれる取り合わせ本であったことが看破されたのである。⁽⁴⁾ 元々既に大島本への疑問点は前掲伊井春樹氏などにより提示されてきたのであるが、⁽⁵⁾ 佐々木氏の考察は大島本の根本的な価値を覆すものであった。状況は大きく動いた。

そしてそのような中で、「別本」に初めての劇的な転機が源氏物語千年紀と言われる平成二十年（紫式部の日記での源氏物語に関する記述の年から千年目の二〇〇八年）訪れた。まず、三月十日京都の揚屋角屋にて、全く存在の知られていなかった「末摘花」鎌倉末期一冊の現存が発表され（加藤洋介氏による）、次に七月十二日東京都内某家より「飯島本」として池田亀鑑の『源氏物語大成 研究篇』に記されていた伝本の全五四帖が現存することが

発表され（池田和臣氏による）、同じく「大成 研究篇」に記載の大沢本が七月二十二日、全五十四帖現存するところが発表された（伊井春樹氏による）。そしてこれらの新出伝本に共通する重要な点は、「源氏物語の「別本」、京都・鳥原の「角屋」で発見」（角屋本／讀賣新聞三月十日記事タイトル）、「54帖の半数近くが別本がとみられ」（飯島本／讀賣新聞記事本文）、「別本は28帖にのほり」（大沢本／朝日新聞日記事本文 以上傍線は稿者に拠る）など、全て「別本」に関わるものであったことである。初めてそしてしかも大々的な形で「別本」がスポットを浴びた極めて特筆すべき出来事だったのである。

「別本」という、謂わば（その他大勢）に嘗てない注目が集まっているということは、つまりはこの物語の世界は一つではなく複数あるということに関心が寄せられているということに他ならない。そうした複数ある世界それぞれを尊重し、この物語の豊かな真の姿を知る為には、本文研究には新しい方法が必要なのである。

一—四— 本文研究の新方法—それぞれの伝本世界の読解

本文研究の新しい方法は伊井春樹氏⁽⁶⁾を嚆矢に生まれ、既に一部では実践されていた。それは、各々の伝本にはその伝本毎の固有の物語世界があり、その固有の世界を一個の独立したものとして尊重し、各々の独自の現存の世界をありのままにとらえ読み解く方法である。固有の物語世界を読み解くことだけならば、従前の研究と変わるところはない。この方法は、それが「別本」というブラックボックスにおいてなされたところに先駆性と独自性があり、いくつかの論考が以後続いた⁽⁷⁾。これらはいずれも物語のある部分に焦点を当てた、いわば断片的な考察であった。

稿者はこの方法を根底に置き、最初から順に読み進めるといふ、散文を読むときのごく普通なあり方で、「別本」

のうち、歌人津守国冬が書写したと伝えられ、国宝絵巻絵詞という現存する最も古い源氏の本文との類似も一部みせ、鎌倉末期にさかのぼる部分をもち貴重な伝本とされながら、今まで言及されることの少なかった「国冬本」⁸に
 的を絞るこれを考察する。断片的でなく、新しいもう一つの『源氏物語』の誕生を目指すという包括的視座からの
 新しい試みであり、その一環として本稿では「国冬本」を素材に、未来の「〇〇本源氏物語」刊行を見据えつつ試
 作版を作成しその世界を考察するものである。

一—五 「国冬本源氏物語」の世界の構築へ

前節のように「国冬本（源氏物語）」を、通行本文と全く同じ感覚で一から通読し、そこから問題点を見つける
 方法を模索する。そしていづれ、一口に『源氏物語』と言っても、今までの底本ではなく諸伝本について、「河内
 本源氏物語」「国冬本源氏物語」「〇〇本源氏物語」等々、各々の伝本の物語世界を尊重し、個々に注釈や現代語訳
 がなされる方向に積極的に研究を進める必要がある。⁹ 更に言えば『源氏物語』は既に世界的な作品である。「日本
 文学として訳すか、世界文学として訳すか」という意見もあり、¹⁰ 日本文学として厳密に訳出するのではなく、世界
 に分かりやすいことを旨とした訳出もあろう。また、他言語による『源氏物語』も、「△△訳源氏物語」と、
 やはり別の文学作品として独立するように将来は進めるべきである。国内外を問わず、複数の豊かな物語群に支え
 られているのが、この物語の真の姿なのである。その究極の未来像に到達するための最初の試みの一つとして、「国
 冬本源氏物語」を素材に、独立した一個の存在として注釈を試作することとする。

二・試作

くり返すが一つの伝本を普通に読み進める事を基本理念としている。しかし五四帖全てに及ぶことは物理的にも無理なことであるしこの度は試作なので、「国冬本」独特の物語世界や表現世界がよくわかる箇所を中心に作成した。

二―一・試作版『国冬本源氏物語』

【凡例】

1. 掲出本文は伝国冬筆各筆源氏物語五四冊（天理大学附属天理図書館 特別本 913・36 イ 329）である。
2. 国冬本が流通した時期と考えられる鎌倉末期から室町期の注釈書を中心に引用した。*注釈書記号 花∴花
鳥余情 紫∴紫明抄 河∴河海抄 岷∴岷江入楚 湖∴湖月抄 提∴源氏物語提要 源∴源注餘滴
3. 翻刻本文（丁数・オ（表）ウ（裏）・行数）・注釈・試訳・稿者補記の順に作成した。独自本文なので注釈が付されていない箇所もある。不審箇所には「ママ」を傍記した。
4. 翻刻は通読の便を考え、私に区切りを入れた 尚、傍線は特に断りなきものは稿者による。
5. なお試訳では本文に無い部分を補った部分は（ ）でくくった。
6. 国冬本は注（8）の岡寫論文にあるように各筆物であり、鎌倉末期本一筆本と室町末期各筆本に分かれるが、先述の如く一つの伝本を頭から読み通す理念に基づき、以下両者から掲出している。

二——— 国冬本・桐壺卷（伝国冬筆鎌倉末期一筆本）——桐壺更衣の描写

【本文】ゑにかきたる・長恨哥の・やうきひかかたちは・いみしきゑしといへとも・ふてかきりありければ・いとほひすくなし・たいゑきのふようも・けにかよひたりし・かたちのいろあひも・からめいたりけん・よそひは・うるはしうきよらにこそ・ありけめ・おはなの・風になひきたるよりもなよひ・なてしこの・つゆにぬれたるよりも・なつかしう・ろうたけなりし・かたちけはひを・もほしいつるに・（十七丁オ6ウ4）

【注釈】「河」…京極北政所本にはおはなの風になひきたるとあり或本には此句なし

「河」…なよひ従一位贈子 たをやかなる心也 又麗

【試訳】長恨歌の絵に描かれた楊貴妃は、どんなに優れた絵師が描いたにしても、やはり絵で表すというのは限界があつて、生き生きしたにおいやかなところは殆ど無い。「大液（池）の芙蓉」とうたわれた楊貴妃に大変よく似た更衣の顔は、唐めいた装いはとても端麗だつたのだろうけれど、尾花が風になびいている様よりもなよやかで、撫子の花が露に濡れているのよりもろうたけでいらしたことを（桐壺帝は）御想起なさると……

【補記】桐壺の更衣の生前の姿形が「大液の芙蓉」「尾花」「撫子」の三つの花によつて象られている。ここで国冬本と類似する本文を二つ掲出する。

（陽明文庫本）「ゑにかきたるようくゑひはいみしきゑしといへともふてかきりありければいとほひすくなし
おはなの風になひきたるよりもなよひなてしこのつゆにぬれたるよりもなつかしかりしかたちけはひをお
もほしいつるに」（十七ウ11ウ十八オ5・『陽明叢書』）

（高松宮家本）「糸にかけるようきひのかたちはいみじき糸といへともふてかきりありければいとほひすく
なしたいえきのふようもけにかよひたりしかたちいろあひからめひたりけんよそひはうるはしうけふらに
こそはありけめなつかしうらうたけなりしありさまはをみなへしの風になひきたるよりもなよひなてしこ
の露にぬれたるよりもらうたくなつかしかりしかたちはひをおほしいつるに」十五ウ三十六オ一・高
松宮御蔵河内本源氏物語」

桐壺の更衣の容貌有様の描写に「尾花・撫子」を対比した表現で用いている点で陽明文庫本が近いけれども、陽明文庫本は国冬本と比べれば文章がかなり短い。掲出した高松宮家本と同様、河内本も「女郎花・撫子」で象っている。「撫子」が他の花と組み合わされて表現の言葉として使用されている例は野分巻にみえる。なお、この箇所に三谷栄一氏の「尾花か女郎花か」（『物語史の研究』有精堂出版 昭和五十年七月）の論考がある。

「大液芙蓉未央柳」は長恨歌の一句であるが、「未央柳」のみ削られている国冬本のような本文がある。伊井春樹氏は、河内本を校訂した光行・親行親子が、「未央柳」を見せけちにしていて俊成本を不審に思い俊成及び俊成女に問い合わせたエピソードを引き、光行・親行親子が最終的に〈親本の行成本も見せけちだったのでそれに做った〉〈若菜下巻で女楽の女三宮の様子が青柳に喩えられているので、二度も女性に柳を喩える重複を避けるため〉〈転写の過程で誤って挿入したが、あまりにも対句めいて表現も適切ではないので〉という理由からそうなったのではないかという結論に至ったことについて、

「河内家の、本文校訂への真摯な態度と判断できなくもないが、俊成の語った行成本のミセケチはどうなるのか、解釈によって本文に手を加えてよいものか、また俊成女の誤写による挿入であるにしても、依拠した本文が存在したのか、定家本はなぜ「未央の柳」を採用しているのか、などと疑問は尽きることがない。これに限らず、証本と

される世に流布する本文において、それぞれ表現が異なるとなると、河内家ならずともどのよう^にに判断してよいのか、迷わずにはおられない」（「中世の源氏学」『文学史上の源氏物語』鈴木日出男編 至文堂 平成十年六月）と記す。国冬本も掲出したように見せけちになつていない。

二——二 国冬本・桐壺卷——「光る君」の呼称の誕生

【本文】よに・たくひなくをかしけなりと・みたてまつらせたまふ・なたかき女御のの御かたちにも・なをこの君のにははしきかたは・まさりて・うつくしけなること・たとえんかたなくて・よの人・ひかるきみときこゆ・ふちつほの御おもひ・とりくなれば・か、やくひの宮とそ・きこえける（二十六オ7ウ2）

【注釈】「岷」…諸抄一同に弘徽殿はらの宮たちの事と云々 聞書同前名たかうおはするとは春宮などの事也愚案 然らば此よにたくひなしとは弘徽殿の心歟 愚案此段いさ、か不審あり弘徽殿腹の姫宮たち朱雀院などの御かたち名たかき事聞えず前に姫宮たちも源氏の君になすらひたるたになしとこそ見えたれしからはよにたくひなしと御門の御心に藤壺をたくひなくおほしめし生得御かたちの名たかくおはするにくらへ給ふにも猶源のかたちはほくとしたる所のまさりたる也前にかきりなき御思ひとちともあり御かたちをもよそへつへきなといへり是等にて了見をくはふる物也是又僻案（註）成へしや

【校異】「女御」に「宮」の異本注記あり。この人物が誰にあたるかは【注釈】にあるように諸説ある。

【試訳】世の人々が類なく素晴らしいとお見あげ申し上げている藤壺の女御様とお比べ申し上げても、なおこの君の美しさは例えようもなく素晴らしいので、世の人は「光る君」とお呼びする。（藤壺の）女御様への帝のご寵愛

も光る君と同様厚いので、並び称して「輝くひの宮」とお呼びする。

【補記】国冬本ではこの箇所が「光る君」の唯一の命名伝承記事となる。「照る」「光る」「輝く」は物語で主人公を賛美する常套文句であり、神話にも王権にも繋がる。「紫明称」「河海抄」は、亭子院第四皇子敦慶親王が「玉光宮」、式部卿是忠親王が「光源中納言」仁明天皇の皇子に「源光」、左大臣高明を「光源氏」に準えている。

二——三 国冬本・桐壺卷卷末—強い思慕のとし目

【本文】さとのとは・もく・すりしき・たてみつかさなどに・せんしくたりて・あらためつくらせ給・もとのこたちやまのた、すまひおもしろき所なるを・いと、いけの心もろくしなし・めてたくつくりの、しる・かゝるところに・おもふやうならん人を・くしてすまはやとそ・なけかしうおほしわたると・なん(三十一ウ1~8) (以下余白)

【注釈】「河」：二条院事也 大工 修理 内匠寮

「源」に「こ、は池のありさまといふがごとく用ゆるなり」とあるが、傍書「ひ」(「いけの心もろく」)を取り入れ「広く」の意で試訳した。

参考 「花」・帚木卷「此発端の詞(稿者注：帚木卷冒頭の「光源氏」のこと。国冬本もこの言葉で始まる)はきりつほの巻の終の詞にひかる君とはこまうとのめてきこえてつけたてまつれるといひつたへたり(稿者注：この巻末の詞、「国冬本」無し)とかけるにうけていへるなり」とある。

【試訳】源氏の君の里邸(二条院)には、木工や修理識や内匠寮に宣司が下って、改築なさることとなった。元々

あつた木立や山の佇まいの趣のあるところや、池のあたりも広く素晴らしく作られた。(源氏の君は)このようなところに、理想と思う人と住むことが出来たなら……とばかりお嘆きになった(とかいうことである)。

【補記】桐壺巻はこうして源氏の君の私邸である二条院改築と、そこに理想の人(藤壺)と共に住みたいものだという源氏の強い思慕で幕を閉じる。「となん」は「とぞ」「とや」「とかや」とともに物語のとじ目の言葉の常套文句。巻末の言葉というのは強い印象を残すものであり、国冬本においては、源氏の藤壺への強い思慕が印象づけられて終わることとなる。⁽¹⁾

「さとのとの」は諸注二条院である。「花」に「今案法興院は二条京極にありもとは二条院と号せるを正暦二年に法興院とは名をかへられたるなり源氏の御さとの二条院はこれになすらふへきにや」とある。この「二条京極」は少女の巻で再度出現する。

二——四 国冬本・少女巻(伝国冬筆鎌倉末期一筆本)——二条院の増築

【本文】

1. 大との・しのふる御すまひなとん・おなしくい・ひろくみと^マころありて・しなして・こ、かしこの・おほつかなき・山さとの人なとん・つとへすませんと・おほして・二条きやうこくわたりに・よきまちをしめて・ふるき宮のほとりに・つくらせ給へり(十八オ7ウ2)

2. 八月にそ・あのとのへ・わたり給へき・ひつしさるのかたを・中宮のいてさせ給へきをりの御方・との、

おはしますへきかたは・たつみ・うしとらは・ひんかしの院の御方・いぬゑは・あかしの御方と・おほしたり・池山の・みくるしきところは・うめつくろはせ給ひて・水のおもむき・山のおもて・あらためて・さま／＼の・御ねかひの心むけを・つくらせ給えり・南には・山たかく・春の花の木を・かすをつくして・うへわたし・いけのさま・ゆをいやかに・すくれておもしろく・御まへちかき・せんさいには・つ、し、こえう・たちはななどの・春の物を・わざと・つくしうへて・秋の物は・むら／＼ほのかに・ませたり・中宮の御方には・本の山に・いろこき・もみちきとん・うへ・泉したり・ゆたかに・なかしやり・水のごゑまさるへく・いまとん・たかく・たてそえ・たきおとして・秋の野を・はるかど・つくれる（十九ウ8〜二十ウ4）（中略）きたひんかしは・すこしかけなる・いつみにて・夏のかげに・よれる・松のき・ちかき・せんさいに・くれ竹・つたの木の・森のやうなる・こえう・おもしろき・山さとめきてそ・見ゆる・卯花のかきね・ことにしわたして・むかしおほゆ（二十ウ6〜11／次の二十一オから帯木巻の一部が混入しているので二十四オに飛ぶ↓）るたち花・なつかしくしやうひん・とこ夏などやうの・草を・とりわき・うへて・春秋の花は・むら／＼みえたり・東おもて・わけて・むまはのおと、・つくり（二十四オ1〜4）（中略）その西にあたりて・中はわけて・ひとつは・みくらまちなりけり（二十四オ8〜9）（中略）この御方の・なかへたて・つかいなんと・ゆきかふ・こ、ろはへ・けちかく・おかしきあはひ也（二十五オ10〜ウ1）

【注釈】「湖」・「むかしおほゆる」…さつきまつ花たちばなの心也

【試訳】

1. 源氏の大臣は、私的なお住まいを、同じ事なら広くて見所もあるようにして、あちこちに離れて住まわせていらっしやる山里の人を（そこに）集めて住まわせようと考えられて、二条京極あたりに、（更に）良い場

所を手に入れて、改築をおさせになる。

2. 八月に、増改築された二条院にお住みになる。邸宅の未申の方を、中宮の里邸とお決めになる。大臣は辰巳にお住みになることを決められる。丑虎は今まで東院に住んでいらした花散里の御方、戌亥は明石の御方のお住まいとお決めになる。池や山で見栄えの良くないようなところは埋め立てるなどさせて、水の風情や山の趣も変えられて、色々な方面の御方々のご要望を取り入れてお造らせになった。南には山高く、春の花の木を数多く植え、池の風情も趣あるようにお造りになり、大臣のお住まいの前栽には、つくし・五葉・橘など春の植物を面白いように植えられて、秋の植物は所々に混ぜられた。中宮のお住まいはもともとあつた山に色の濃い紅葉を植えられて、泉を綺麗につくり、滝を高くから落として、秋の野をお造りになった。(中略) 北東の方は、涼しげな泉があり、松の木の近い前栽に、夏の日差しを避けるように呉竹・蔦の木を森のように植え、五葉が山里めいた趣で植えられている。卯花の垣根を格別に作らせて、昔を思わせる花橘、薔薇、常夏などの草をお選びになって植えて、春の花も秋の花もところどころ顔を見せるといった風情である。東面は、敷地を分けて馬場殿を造られた。(中略) ここに集められた方々のお住まいの隔ては工夫されており、御方々は親しみやすい様子になっていらつしやつた。

【補記】二——三【補記】に述べたように、桐壺巻巻末は「さとのとの」(二条院)の改築で巻を終わっており、その二条院に「花」は、元二条京極にあつた法興院をモデルにあげていた。そしてこの少女巻のこの箇所「二条京極」が記されている。他伝本は少女巻といえは六条院造管が描かれている巻であるが、国冬本のみ二条院である。仮に最初は「六」と「二」の誤植だったにしても(原本の字母が似通っている)、最後まで二条院造管で話は進み完結している。四つの〈町〉が記されるところが「方」になっていたり、また「六条院」↓「あのとへの」、「西の

町]↓「その西にあたりて」、「この町の中のへたて」↓「この御方のなかへたて」などとなっており、広大な六条院の話とは異なる二条院の世界が細部においても破綻なく描かれているのがわかるのである。⁽¹²⁾

二——一五 国冬本・野分卷(伝柳原殿淳光卿筆室町末期本)——六条院の童女の描写

【本文】しをん・なてしこの・こきうすき・あこめともに・をみなへしのかさみなとやうの・時にあひたるさまにて・四五人つれて・こ、かしこの草むらによりて・色々のこともを・もてさまよひ・をみなへしなてしこなどの・いとあはれけなる・枝とも・取もてまいる・きりのまよひは・いと・えんにそ・見えける(十二ウ4十三オ2)

【校異】「紫」は「きりのまより」を「間也」とする。「まより」「まよひ」と異同あり。

【試訳】(童女が)紫苑、撫子の濃い色や薄い色の袷に、女郎花の色目の上着(汗衫)の、秋に似合った襲を着て、四五人でここその草むらで虫かごをもつてうろうろとし、女郎花や撫子が、野分の風にやられてかわいそうな様子でいるのをすみ取ってきたりしている様子が、霧に紛れながら見えるのは、非常に優雅に(夕霧には)思われた。

【補記】桐壺卷二——一の補記で、「撫子」が他の花と組み合わせられて表現の言葉として使用されている例は野分卷にみえる」と記したように、ここでは「女郎花・撫子」の例が見える。桐壺卷でも「尾花・撫子」のあたりの花の描写を省略しない国冬本のような伝本もあれば、省略する伝本もあった。この野分卷でも、「撫子」は「常夏」の詞で入れ替わっても諸本描出されているが、「をみなへしなてしこ」の(おみなへし)は省略している伝本もある。童女の汗衫の色目に一度出たので、二度の描出をくどいものとしたということが、桐壺卷の例から考えられる。同じ「国冬本」といっても桐壺卷は伝国冬筆鎌倉末期一筆本、野分卷は伝柳原殿淳光卿筆の室町末期本という違いは

あるけれども、描写を省略しないという点で同じ傾向をもつことに留意したい。⁽¹³⁾

二——六 国冬本・柏木卷（伝国冬筆鎌倉末期一筆本）——「煙比べ」の歌に続く箇所について

【本文】心くるしく・ききながら・いかてか・た、・をしはかり・のこさんとか・あるは・

たちそひて・きえやしなまし・うきことを・おもひこかる、・けふりくらへに・とあるを（七オ1―6）

【校異】「おもひこかる、」——国冬本・東大本、「おもひみたる、」——他伝本

また他伝本は歌の後、「おくるべうやは」の一文がある。国冬本のみ無い。

【注釈】「提」…此哥の心は、そなたゆへにわれもうき名たつ身なれば、立そひてむなしきけふりにのほらはやのこ、ろ也。去ほとに、けふりくらへにとはよみ給へり。柏木の歌に、おもひの名をや残さんとあるによりて、たちそひてけふりくらへと云り。

【岷】…をくるへうやはといへる詞もきこえたる歟

【試訳】（女三宮の柏木への返信）「（ご）病氣のことを）お気の毒には聞いてはおりますが、どうしてお便りができませんようか。どうかご推察の程を。「残さん」などと歌にお書きになっていますが、

私も一緒にできれば消えてしまいたい。貴方の苦しみと私の苦しみのどちらが大きいか消えゆく煙で競いながら」とあるのは…

【補記】『無名草子』（群書類従本）では、「遅るべくやは」とある女宮ぞ憎き」とある。この「遅るべくやは」の言葉は「遅れをとりましようか、決して後れを取りません（私の方があなたよりずっと苦しみは深い）」と、優柔

不断な宮にしては珍しくきつぱりと言い切り、強い言葉に対する批判が述べられている。他伝本には存在するこの言葉の無い国冬本は、歌の二句目「きえやしなまし」が強い印象を残し、自分も消えてしまいたいという、通行本でおなじみの宮らしい現実逃避的な部分が見える。

二——一七 国冬本・鈴虫巻（伝国冬筆鎌倉末期一筆本）——過去を反芻し成長する女三宮像

【本文】世中・ひとへに・おほしおこり・あそひたはふれ事に・うつらせ給に・きしかたこそ・すこし・いはけたる事も・おはしましけれ・よのうきことを人しれす・おほししる・わか御心つからのことには・あらねと・なを・心つかひすへき・よにこそ有けれ・など・おほしわかる、・事ともありて・いとふかう・のとやかに・御をこなひをし（四ウ2くウ9）

【試訳】女三宮は今までは人生というものを驕り、遊び戯れるものと考えて日々を送っていらつしやつた。来し方こそ、（このように）少し幼稚でいらしたけれども、（柏木との件で）人の世の苦しみを人知れず知ることになった。この苦しみは宮が御自らお望みになったことではないが、やはり自らよく考えて生きていくべきなのが人生であると、お分かりになるようになって、深い思いをおもちになりつつ、のどやかな仏道生活をなさっていらして：

【補記】この箇所全体が国冬本鈴虫巻の独自本文である。国冬本鈴虫巻にはこのような長文の独自本文がいくつか散見する（伊藤鉄也氏『源氏物語』の異本を読む―「鈴虫」の場合）（国文学研究資料館編 臨川書店 平成十三年七月）に詳しい）。この箇所は一般には幼い精神性が特徴と思われる女三宮の、珍しい人間的成長の様が見てとれる特異な本文と¹⁴言える。

三、終わりに―意義と未来

以上国冬本の物語世界がよく分かる箇所限定して数巻を取り上げ注釈の試みをした。このうち、桐壺巻（特異な呼称「光る君」の象徴する世界）・少女巻（六条院ではなく二条院が造営される世界）・鈴虫巻（内省する独自の女三宮像）については、それぞれの箇所の補記及び脚注で示したように、特異な世界をもちつつも、それぞれの巻でその世界は完結し発展することがないという共通点をもつ。となると、これらは皆伝国冬筆鎌倉末期一筆本であるが、その流通は、一筆本が一かたまりに、という形ではなかったかもしれない。というのは、それぞれの連続する次巻、即ち桐壺の次の帚木巻・少女の次の玉鬘巻・鈴虫の次の夕霧巻はいずれも伝国冬筆鎌倉末期一筆本であり、錯簡脱落があるにしても、各々の前の巻に見られたそれぞれの特異な世界が次巻で何らの発展・展開を見せていないからである。またそれ以降の巻巻に特異な世界が引き継がれることもない。それ故に、鎌倉末期一筆本がもし五四冊全て現存していたら、そこに特異な世界が自己完結することなく展開していたのかもしれないという仮説には、慎重でありたい。

最後に当該試作の位置づけと意義について述べる。まず、こうしたことによつて、我々が見知るのとは異なる源氏物語が次々と、一つの独立した物語として読みうる形に自立することが可能になるならば、数多の源氏物語の存在こそがこの物語の豊かな真の姿なのであるから、そこに接近することが可能になることを最初に述べたい。

また世界的な作品という意味においては、例えば“The Tale of Genji, Kunifuyu Version(Text)”という形で、独立した作品として認知させることを可能にし、アーサー・ウェリー訳（英語）、ロイヤル・タイラー訳（英語）、ル

ネ・シフェール訳（仏語）・田溶新訳（韓国語）などと同レベルで（cf. Tyler Version, Knifuyu Version, etc.）が位置づけられ、『源氏物語』の豊かな可能性を、具体的な形で世界文学として認知させることが可能になる。⁽¹⁵⁾

一―三―で述べたように、今まさに源氏物語の未詳だった世界が次々と明らかになりつつある。源氏物語は本研究の新時代⁽¹⁶⁾に入ったというべきである。先学の礎の上にあることを十二分に自覚しつつ、既存の価値観に囚われることなく進みたい。その為に、いずれ伝本毎の個別の注釈書が生まれることが必要であり、その最初の試みの一つに本稿を位置づけたい。

〔注〕

- (1) 伊井春樹氏 「源氏物語の伝本」〔国文学解釈と鑑賞〕六五卷十二号 至文堂 平成十二年一月
- (2) 加藤洋介氏 「河内本について」〔源氏物語の鑑賞と基礎知識 花散里〕至文堂、平成十五年六月
- (3) 文献学の見地から新しい分類試案を提示し続けているのが、新美哲彦氏であり、「源氏物語」諸本分類試案――「空蟬」巻から見える問題」〔国語と国文学〕八四卷十号 平成十九年十月）等、「源氏物語の受容と生成」〔武蔵野書院 平成二十年九月〕に再録）がある。
- (4) 「大島本源氏物語」に関する書誌学的考察」〔斯道文庫論集〕第四十一輯 平成十九年二月
- (5) 室伏信助氏「大島本『源氏物語』採択の方法と意義」（新日本古典文学大系『源氏物語 一』岩波書店 平成五年）伊井春樹氏「大島本源氏物語本文の意義と校訂方法」〔論叢源氏物語Ⅰ〕新典社 平成十一年）
- (6) 「陽明文庫本源氏物語の方法」、『国語国文』六十二卷一号 平成五年）等
- (7) 中村一夫氏「保坂本源氏物語の一性格―朝顔巻の別本をめぐって」〔本文研究〕第一卷 和泉書院 平成八

年七月)、中川照将氏「陽明文庫本『源氏物語』における「男」と「女」―源氏と六条御息所を中心に」(『本文研究』第三卷 平成十二年八月)、また本稿で扱った国冬本については伊藤鉄也氏が数点論考を刊行している(『源氏物語本文の研究』おうふう 平成十四年 所収など)。

(8) 国冬本の詳細な書誌は岡寛偉久子氏「源氏物語国冬本―その書誌的総論」(『ビブリア』百号 平成五年十月、『源氏物語の研究と基礎知識 横笛・鈴虫』至文堂 平成十三年)に再録がある。

(9) 加藤昌嘉氏は「そもそも私は、大島本を底本にして『源氏物語』の注釈書を作る必然性を全く感じていない。大島本が諸注釈書の底本に選ばれている理由は、【1】(浮舟巻を除く)五三帖が揃っている、【2】書写状況や伝来過程が或る程度わかる、【3】ごく一部の巻が定家本・明融本と近似する、というだけのことだ。既に、大島本を厳密に調査した新日本古典文学大系というテキストが世に供されているのであるから、これからは、高松宮本を底本にした注釈書、穂久邇文庫本を底本にした注釈書、保坂本を底本にした注釈書などが、次々と作られてゆくのが学問的に健全な展開なのではあるまいか。どの写本が原作者オリジナルに近いのか解らないというのは、読者にとって大いなる僥倖である。現存する写本を同じ土俵で読むことができるのだから」(『句読を切る。本文を改める。』「講座源氏物語研究8」おうふう 平成十九年四月)と提言している。

(10) 青木周平氏・辰巳正明氏ほか(『座談会』日本文学の可能性を探る―隣接科学との協同と国際化への道』、『國學院雑誌』(國學院大学、百八巻一号)における、河添房江氏の発言)。

(11) この巻末は他伝本は全て高麗相人による「光る君」命名伝承記事で閉じており、国冬本源氏物語のみ異なる。世の人によって称賛され、更に、巻末という印象の強く残る場所において外国の相人の命名伝承という外国の權威に、二重に称賛されるという点(河添房江氏の諸論考より)に、他の昔物語との絶対的な差異と独自性が

あったなら、そのような巻末ではない国冬本桐壺巻の「光る君」及びその呼称が象徴する物語世界は、当時の他の昔物語と同様の古風な姿をみせていることになる。この点については拙稿「国冬本源氏物語の「光る君」

―特異な桐壺巻巻末の物語るもの」(『物語研究』 第8号 物語研究会編 平成二十年三月)に詳述した。

- (12) このように他伝本と異なり、一つ国冬本だけ二条院造営が描かれるなど、国冬本少女巻のいくつかの特殊な様については、拙稿「源氏物語の別本の物語世界―伝国冬本少女巻を中心に」(『文学・語学』一八二号) 平成十七年七月三十日)に詳述した。この「二条院栄華の世界」はこの巻でのみ完結し、以後継続するということはない。蛭巻で唐突に「みなみの町」と、「方」ではなく「町」が登場し、野分巻には「六条おんにまいりて」と、六条院の世界が当然のように描かれている。

- (13) 新美哲彦氏は「国冬本や保坂本は、別本として有名だが、補写の巻に関して言えば、日大蔵三条西家本や河野美術館本などと非常に近く、一つのグループを形成している。室町期補写の国冬本や保坂本が、同じく室町期書写の日大蔵三条西家本や河野美術館本と近接する本文を有する事実は、そのような本文が室町期の堂上家で広く流通していたことをうかがわせる」(注3)と述べ、国冬本で今まで軽視されがちであった室町期補写本の価値に関して注目される発言をしている。稿者も平成二十年七月の口頭発表で、国冬本・高松宮家本の橋姫巻の類似について言及した。(大阪大学古代中世文学研究会)

- (14) 拙稿「国冬本における女三宮について―鈴虫の巻を中心に」(『国語国文』平成十四年二月)に詳述した。このような我々の見知る宮の人間像は鈴虫巻のみにみられるもので、例えば同じ国冬本・幻巻では無神経に「谷には春も」とつぶやき源氏を落胆させる相変わらぬの人間像がえがかれている。

- (15) その為には稿者は平成二十年十二月二十日(土)韓国語日語日文学会(於ソウル)で口頭発表を行った(題目

は「国冬本源氏物語について―未詳の伝本が見せる多様な物語世界」。

(16) この物語の本文研究は「まさしく今が旬、そして〈戦国時代〉にある本稿と一部重なる。」(上原作和氏)からこそ、「ねばり強い「基礎」研究」(陣野英則氏)に立ち返る姿勢が肝要だろう(引用は『本文史学の展開』言葉をめぐる精査(テーマで読む源氏物語論(2))「上原作和氏・陣野英則氏(編)今西祐一郎氏・室伏信助氏(監修)勉誠出版 平成二十年 七月)から。同書は源氏の本文研究の主要論考を再録。

〔付記 本稿は科学研究費補助金(特別研究員奨励費)の助成を受けた〕



図 野分巻(伝柳原殿淳光卿筆 室町末期)

12ウ4、13オ2行 天理大学附属天理図書館蔵

正 誤 表

■175 ページ 5行目

誤 年) に再 録一 正 年に再録)

■176 ページ 14行目

誤 した, (大阪大学古代中世文学研究会)

→ 正した(大阪大学古代中世文学研究会)